様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０２３０

研究課題名（和文）近世日本の琴楽受容に関する研究

研究課題名（英文）A study on the reception of guqin(qin,ku-ch'in)-music in Japanese early-modern times

研究代表者
中尾　友香梨（NAKAO, Yukari）

佐賀大学・文化教育学部・准教授

研究者番号：１０４４１７３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本近世の知識人たちによる琴楽受容の諸様相を考察し、その背後にある時代の潮流及び学術・思想の動向を分析した。その結果、時代によって琴楽受容の様相は大きく異なり、それは受容者たちの生きた時代背景、及び彼らが信奉した学問・思想体系と密接に関わっていることを明らかにした。また、近世琴人データベースを構築し、『江戸時代の琴詩集』と『江戸時代の琴文集』を編纂して、今後のこの分野の系統的な研究のために基盤を築いた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined how intellectuals in Japanese early-modern times perceive guqin(qin,ku-ch'in)-music and analyzed the underlying spirit and academic/philosophical trend. I found that peoples' reception of guqin-music differs considerably from one era to another: Each era presents different environments that affect the appreciators of such music and the academic/philosophical system that they followed. Further, I developed a database of the guqin-artists in Japanese early-modern times and compiled "The Poems of Guqin-Music in Japanese Early-Modern Times" & "The Prose of Guqin-Music in Japanese Early-Modern Times" for make a substructure for related future systematic studies.

研究分野：人文学

キーワード：琴楽　琴学　七絃琴　日中比較文化　日中文化交流　音楽　日本近世　思想

１．研究開始当初の背景

江戸時代に次々と長崎に来航した中国の貿易船は、多くの交易品を運んで来ると同時に様々な文化をも将来した。その一つが「音楽」である

しかし、奈良・平安時代に雅楽が中国より伝来し定着したことは、比較的によく知られているものの、江戸時代にも一部の中国音楽が日本に流入し受容されたことは、まださほど広く知られてはいない。

一方、日本近世の学問・思想・文化を考える上で、「音楽」は欠かせない要素の一つである。したがって当時の人々、特に知識階級が中国より伝来した「音楽」を、どのように認識し受容したかというのは、極めて重要な問題である。

だが、これに関する系統的な研究はまだなされていない。このような状況を踏まえて、研究代表者は数年来、日本近世における中国音楽の受容について研究を進めているが、本研究はその一環として、琴楽（七絃琴の音楽）の受容について考察したものである。

２．研究の目的

琴とその音楽は、奈良・平安時代にすでに日本に伝来し、貴族階級によって愛好された。『源氏物語』には琴を弾ずる場面がしばしば登場し、『宇津保物語』はまさに琴を中心に物語が展開されている。

しかし、平安時代後期に至って琴楽は徐々に衰退し、平安時代末期にはその伝承が完全に途絶えた。そして、江戸時代前期に明僧東皐心越（1639～1695）の来日に伴い、琴楽は再び日本に流入して再興を見た。

日本近世に琴を嗜んだ人物は数多く、その身分もさまざまである。公卿・大名・幕臣・藩儒・医師・僧侶・書家・画家・豪商など、さまざまな階層の人々が琴楽を習い、また広めたのである。

しかし、心越の伝えた明代琴楽に対する彼らの認識と受容態度は、必ずしも一様ではなかった。それは琴楽受容者たちの生きた時代背景、及び彼らが信奉した学問・思想体系と密接に関わっていた。

したがって、近世日本の琴楽受容をめぐる諸問題は、けっして単に「音楽」の領域に限定されるものではなく、当時の知識人たちの雅俗認識及び中華思想へのイデオロギーと密接に連動していた。

本研究の目的は、近世日本の知識階級による琴楽受容の諸様相を考察することにより、その背後にある歴史的潮流及び学術・思想の動向を探ることである。

３．研究の方法

近世の諸文献から琴または琴楽に関する漢詩・漢文・随筆などを丹念にピックアップし、その内容を詳細に分析することによって、異なる時期の異なる人物による琴楽受容の特徴を見出し、その背後にある歴史的潮流及び学術・思想の動向について考察するという方法をとった。

４．研究成果

（１）近世琴人データベースの構築

近世の諸文献から琴楽受容者（琴人）たちに関するデータを蒐集し、近世琴人データベースを構築した（収録琴人 410 名）。検索項目に、琴人の姓、名、字、号、通称、身分、生年、没年、出身地、主な活動地、師弟関係などを設け、どの項目からも検索が可能なようにした。

この成果によって、近世日本の琴楽受容者たちに関する情報が簡単に検索できるようになった。

（２）『江戸時代の琴詩集』と『江戸時代の琴文集』の編纂（図書①、図書②）

近世の諸文献から琴または琴楽を詠んだ漢詩、琴または琴楽について書かれた漢文を蒐集し、『江戸時代の琴詩集』（68 名による 422 首の作品を収録）、『江戸時代の琴文集』（16 名による 39 篇の作品を収録）を編纂した。

これらの図書はいずれも初めて編纂されたものであり、この成果によって、従来まったく整理されていなかった近世日本の琴楽受容に関する基礎資料が一部整理され、今後のこの分野の研究に大いに役立つはずである。

（３）江戸前期の幕儒人見竹洞（1637～1696）の琴楽受容について（学会発表②）

琴楽は中国の漢の時代に礼楽思想の興隆とともに発達し、儒家思想の象徴物としてその性格が決定づけられた。一方、六朝時代に琴は隠逸思想を代表する楽器とされ、儒家思想に老荘思想が加わった。さらに北宋時代には禅の思想が加わり、琴楽は儒仏道融合の音楽として、明清時代に隆盛を極めた。

そして、江戸前期に明僧東皐心越によって日本にもたらされた琴楽は、まず幕府の儒臣人見竹洞によって受容された。

心越が日本に伝えた琴楽は、当然ながら儒仏道融合の明代琴楽であった。現存する『東皐琴譜』の曲目を見る限り、仏教関係の琴曲は含まれていないものの、心越自身が仏僧であり、また「調絃入弄」（音取り用の小曲、歌詞は北宋の道士陳摶の名を称えるもの）や「鷗鷺忘機」（『列子』黄帝篇の寓話に取材した琴曲）など、道教思想に由来する曲も含まれている。

しかし、竹洞はこられに対して目角を立てることなく、極めて積極的に受け容れた。そして自らも琴楽を儒仏道融合のものとして見なす発言を残している。

ただ、歌詞の冗漫なものや指法の難しい琴曲に関しては、改編・改訂を心越に依頼しており、その結果、心越によって中国から伝来した琴曲はさまざまな改編・改訂を経て後世に伝えられ、今日に至っている。中には竹洞の依頼によるものも少なからずあったと見られる。

そういう意味でも、人見竹洞は近世日本の琴楽受容と再興の基礎をつくった人物であり、その意義は大きい。

中国の「華夷変態」（明清交替）という衝撃的な歴史事件からまだ半世紀も経っていないこの時期、日本の知識人たちはそれまで東アジア世界を支配していた絶対的な権威である「中華」（明）が、異民族の清によって滅ぼされた現実に対するショックからまだ完全には抜けられずにいた。そこへ隠元、朱舜水、心越などの文化人が海を渡って来日したので、積極的に彼らから中国（明）文化を習得・保存・継承しようとした。琴楽もその一つである。

心越の伝えた琴曲に対して、竹洞が改編・改訂を求めたのも、けっして明文化に対する否定ではなく、むしろ有効に保存・継承するための工夫の一環であったと見ることができる。

（４）江戸中期の荻生徂徠（1666～1728）と山県大弐（1725～1767）の琴楽受容について（学会発表⑦）

荻生徂徠が朱子学の「理」にもとづく世界観を批判し、「礼楽」「刑政」による教化と法治を主張したことはよく知られている。但し、徂徠が唱えた「礼楽」の「楽」は「古楽」（中国の周・漢の時代の音楽）に限定されるものであり、そのため彼は古楽への復帰を主張した。

そして、中国の楽制や楽論に対する一連の分析を通して、古楽はもはや中国では散逸し、日本にこそ残っているという観点を打ち出した。彼のこのような見解は、四十五歳の時すでに打ち出されていたが、晩年に「碣石調幽蘭第五」琴譜に出会ったことにより、それは確信へとつながった。

徂徠が入手した「幽蘭」琴譜は、楽家の狛家に伝わるものであり、後水尾天皇（在位1611～1629）より同家に下賜されたものである。おそらくは遣唐使によって中国より伝来し、天皇家に奉納されたものである（引用文献①）。

徂徠はこの琴譜が当時日本に流入していた明代の琴譜と大きく異なることに驚き、その記譜法（文章譜）と筆蹟から、桓武天皇（在位 781～806）以前のものと判断した。したがって、古の琴楽は中国ではすでに伝を失い、日本にこそ残っていると確信したのである。

そして、古楽の「和応」（順八逆六）の理論に照らし合わせれば、もともと琴楽には「歌調」しかないはずなのに、明朝の琴は「奏調」に合わせているので、絃が細くしかも緩いとし、「故其ヒゞキ微音ナリ。微音ナルヲ雅楽也ト覚ユルハ道理ヲ知ラザルモノゝ料簡ナリ」（「琴学大意抄」）と酷評した。また、琴譜も明朝より伝わったものを見れば、音節が短促であり、俗謡のようなものであるとして、明代琴楽を全面否定した。

つまり、徂徠にとって琴楽はあくまでも雅楽の一部であり、けっして文人趣味ではなかった。だからこそ、明代琴楽を否定し、古の琴楽に復帰することを主張したのである。

徂徠のこのような琴楽観は、やがて山県大弐によって受け継がれ、さらに発展させられた。徂徠が琴楽の復元と復興の手がかりを「幽蘭」琴譜に限定したのに対して、大弐は「幽蘭」に加えて、「五常楽」「千秋楽」「拾翠楽」「合歓監」「喜春楽」「新羅陵王急」「武徳楽」「胡飲酒破」「抜頭」の笛譜・觱篥譜に求め、自らその琴譜を作成した。

（５）江戸後期の村井琴山（1733～1815）の琴楽受容について（学会発表①、雑誌論文①）

肥後熊本藩の医師村井琴山も琴楽を愛好した人物の一人である。ただ、日本近世のほとんどの琴人が心越系統の琴楽または清僧竺庵万宗系統の琴楽を受容したのに対して、琴山はそのいずれの伝をも受容せず、数年間、独学を続けた後、長崎で出会った清の貿易商、潘渭川から琴楽を習った。

しかし、琴楽を清（中華思想においては野蛮な異民族）商（儒教においては身分の低い階層）に習うのは、仏僧の伝に習うよりも、さらに聖人の大器（琴）を穢すことになるのではないかと非難する人がいたので、琴山はその理由を次のように説明している。

清人はもともと異民族であるが、いま彼らが説いているのは聖人の道であり、尊ぶのも聖人の教えである。したがって彼らとは礼楽刑政をともに謀ることができる。一方、心越と万宗はもともと中華の人であるが、彼らが説いているのは仏陀の教えであり、奉ずるのも寂滅涅槃の道である。したがって彼らとは礼楽刑政をともに謀ることができない。

琴は聖人の器であり、楽の統であるので、これを仏僧に習うわけにはいかない。

一方、日本はいま（当時）薬品から器物、織物、書籍に至るまで、多くのものを清商に頼っている。康熙年間に刊行された『六論衍義』は幕府によって翻刻され国中に広められており、『康熙字典』、『淵鑑類函』、『佩文韻府』などは検索に便利であるため、文人・学者たちが家々に蔵して重宝している。また、儒者の中には、趙子昂（清と同じく異民族王朝である元の時代の人物）の書画を習い、甚だしくは清朝考証学の先駆者、毛奇齢の経説を剽窃して、自作として公刊する者すらいる。これらに比べれば、清商の琴伝を受けるのはけっして恥じるべきことではないのである。（『琴山琴録』）

琴山が心越系統または万宗系統の琴楽を受容せず、清の貿易商、潘渭川による琴楽を

受容した主な理由は以上のようであるが、その背後に窺えるのは、「中華思想」（華夷思想）に対する日本近世の知識人のイデオロギーの変化である。

「清＝夷」という伝統的な「中華思想」にとらわれず、時の中国＝清を客観的に評価しようとする動きは、第八代将軍徳川吉宗（在位 1716～1745）の時代から、吉宗本人を中心にその周囲の御用学者たちの間ですでに見られていたが、琴山の生きた江戸後期には、もはや中央の御用学者のみならず、地方の在野の知識人にも同様の姿勢が現れたことを意味する。

しかも、琴山は心越らの伝えた琴曲に歌詞の典雅でないものが混じっていることを不満に思い、さらに沈佺期の「霹靂引」、蘇軾の「憶別離」、鄒許士の「離別難」、馮延巳の「長相思」などはその内容が卑俗で、先王の道を詠歌する士君子の琴歌にふさわしいものではないと批判した。特に「調絃入弄」などは最も鄙俗なものであり、士君子が道士の陳摶を称えることなどあり得ないと一蹴した。

琴山のこのような受容態度は、儒仏道融合の琴楽をきわめて積極的に受容した江戸前期の竹洞の場合と好対照を成す。また、琴山は徂徠と同じく明代琴楽を否定したが、それは徂徠のように琴楽の復古を狙ったからではなく、聖人の大器である琴を仏僧に習うべきではないという考えに出発するものであった。

このように、日本近世の知識人たちによる琴楽受容は、各人の生きた時代背景及び彼らの信奉した学問・思想体系によって大きく異なるが、今後は本研究で得た成果を踏まえ、他の人物たちによる琴楽受容についても研究を進め、近世日本の琴楽受容についてより全面的な考察を行う予定である。

＜引用文献＞

①山寺美紀子『国宝「碣石調幽蘭第五」の研究』北海道大学出版会、2012 年、29～30 頁。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①中尾友香梨「日本近世の琴学受容に見る『知』の動向―江戸後期の村井琴山を中心に―」、『アジア遊学』第 176 号（小島康敬編『東アジア世界の「知」と学問―伝統の継承と未来への展望』）勉誠出版、2014 年 8 月、51～64 頁、依頼論文。

②中尾友香梨「三章六句の抒情―時調」、『アジア遊学』第 152 号（静永健・川平敏文編『東アジア世界の短詩形文学）勉誠出版、2012 年 5 月、97～110 頁、依頼論文。

〔学会発表〕（計 7 件）

①中尾友香梨「村井琴山の琴学受容と『実学思想』」、第 12 回東アジア実学国際学術大会、2013 年 11 月 23 日、於国際基督教大学（東京）

②中尾友香梨「琴学の受容と再興に見る近世日本の学術の動向―人見竹洞・荻生徂徠・村井琴山を中心に―」、日本近世文学会平成 25 年度秋季大会、2013 年 11 月 17 日、於三重大学（三重県）

③中尾友香梨「論日本江戸時代的琴学之復興」、第８回東亜楽律学国際学術大会、2013 年 11 月 3 日、於中国温州大学（中国温州市）

④中尾友香梨「近世日本における中国琴学の受容について」、九州大学中国文学会第 268 回文藝座談会、2013 年 9 月 21 日、於九州大学（福岡）

⑤中尾友香梨「日本における明楽の受容」、国際シンポジウム「東アジアの共通教養としての『礼楽』」、2011 年 6 月 5 日、於韓国国学振興院（韓国慶尚北道安東市）

⑥中尾友香梨「江戸時代における明楽受容の諸問題」、九州大学中国文学会第 253 回文藝座談会、2011 年 4 月 23 日、於九州大学（福岡）

⑦中尾友香梨「江戸中期の琴学観についての一考察」、第 28 回九州近世文学研究会、2015 年 5 月 23 日、於九州大学（福岡）

〔図書〕（計 7 件）

①中尾友香梨『江戸時代の琴詩集』、大同印刷、2015 年、計 131 頁。

②中尾友香梨『江戸時代の琴文集』、大同印刷、2015 年、計 111 頁。

③中尾友香梨・井上敏幸『文人大名鍋島直條の詩箋巻』佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2014 年、計 60 頁。

④青木歳幸・白石良夫・中尾友香梨（掲載順 5 番目）ほか 12 名『佐賀学Ⅱ―佐賀の歴史・文化・環境』岩田書院、2014 年、計 304 頁。

⑤若木太一・井上敏幸・中尾友香梨（掲載順 8 番目）ほか 18 名『長崎・東西文化交流史の舞台―明・清時代の長崎―』勉誠出版、2013 年、計 503 頁。

⑥小島康敬・小島毅・中尾友香梨（掲載順 13 番目）ほか 11 名『「礼楽」文化―東アジアの教養―』ぺりかん社、2013 年、計 420 頁。

⑦後藤正英・吉岡剛彦・中尾友香梨（掲載順6番目）ほか6名『臨床知と徴候知』作品社、2012年、計345頁。

６．研究組織
研究代表者
中尾友香梨（NAKAO,Yukari）
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：10441734